

平成16年度 日本古典籍講習会に参加して

松井 真由美

1 はじめに

平成17年1月25日（火）～27日（木）の3日間にわたり「人間文化研究機構 国文学研究資料館（以下「国文研」）主催の標記講習会に参加した。

この講習会は、国内外で日本の古典籍を扱っている図書館や文庫の司書を対象とし、古典籍の基礎知識や取り扱い等の技術の習得を目的として年1回開催されている。

国文研は、2004年4月に国立機関の法人化で5機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族博物館）で構成する人間文化研究機構の1機関となったばかりで、19世紀以前の古典籍を調査・収集・提供し、現在、約8千点3万冊の古典籍を所蔵している研究機関である。また、独自の目録データベースを作成し公開していることでも知られている。特に、国内外に存在する日本古典籍の総合目録化に取り組んでおり、古典籍の専門家養成にも力を注いでいる。

この講習会は2年前から実施され今回は2回目である。第1回目は海外で日本古典籍を扱っている約25名を対象に5日間行われた。今回の講習会には、多くの参加希望者があり、北は北海道から南は九州までの34名が受講した。

私は、今年度より和古書の収集・受入・整理業務を担当することになった。初めて手にする古典籍を目の前にし、その整理についての知識・技術の必要性を切実に感じていたため、今回の講習への参加を希望したのである。講義は、江戸時代末までに著された写本・版本についての基礎的内容を中心として、さらに、発展講義も加わり広い範囲に及び集中的に行われた。

以下、講習会の①概要、②古典籍の基礎について、③古典籍の特徴について、④担当業務と関連して印象に残ったこと、⑤所感を記して報告としたい。

2 概要

講習会は、1基礎講義、2発展講義、3基礎実習の3種類に大別でき、それぞれ7つ、4つ、1つで合計12の講義が行われた。その間、書庫を案内して頂いたり展示室の見学もできた。展示室では、「和書のさまざま 書誌入門」と題しての展示が行われており、まさに本の形態の変化を体系的に知ることができた（後に本の形態について報告する）。

1日目の基礎講義では、「国文研の和古書目録作成の現状」と「日本古典籍の基礎知識と問題点」、夕刻には、参加者と国文研の講師の方々とのレセプションがあり、情報交換や親睦を深めた。2日目の基礎講義では、「蔵書印の見方・読み方」、「くずし字の読み方」、発展講義では、「古筆切の魅力」、「歴史資料の意義（史書と歌書）」をあらかじめ用意されたテキストに基き講義を受けた。

3日目の発展講義では、「近世出版史（刊記と版元）」、「写本からわかること（奥書と年代認定）」、基礎講義・実習では、和古書目録の書誌レコード作成要領の説明を受け、さらに実際の和装本を各自1冊ずつ手にとり目録作成方法を館員の方から学んだ。

最後は国立国会図書館の古典籍資料の電子化についての報告があり、30分程度の意見交換の場が設定された。

3 古典籍の基礎を学ぶ

(1) 日本古典籍とは何か

和古書とも言いここでは、主として慶応4年（1868年）以前に日本で成立した書物を指している。対象を慶応4年に限る理由は、明治元年（1868年）に近代国家成立により出版を含めた諸制度が急速に西欧化し、書物文化が大きく変容するからである。しかし、明治時代になっても慶応4年以前の版を用いて出版された刷りは、古典籍の仲間になる。

ところで、全ての和装本を古書とする見方もある

が、国文研の『日本古典籍書誌レコード作成要領 2004.12』によると、明治期の整版・木活字本や明治以降に書写した写本（新写本）も新たに古典籍の対象となった。つまり、今までの和古書の定義と異なり古典籍は、写本・版本・活字本の中から近代的印刷法・出版によるものを除外した、書籍その他の資料であり、日本人によるまたは、日本で出版された日本語によるもの、と新たに定義づけられた。

このように、古典籍という言葉は、まだ、図書館員の中でも馴染みの薄い用語で古書、和漢書、和装本などの用語の定義も人によって違いがあり、用語として共通の理解・判定も揺れ動いているようだ。

(2) 古典籍（和古書）の種類について

わが国の古書の伝存は世界一と言ってもよいほど豊富で、特に江戸時代後半の出版物は多量に残存しておりその量は、出版史上の全容をまだ十分つかめられないほど多い。これらの古書を見たり目録を作成するにあたっては、①筆で書かれた本すなわち書写本、筆写本とも呼ばれている「写本」と、②印刷された本すなわち刊本とも呼ばれている「版本」か、に分けて見るほうがわかりやすい。ちょうど西洋の装飾写本であるマニスクリプトとインキュナブラとの関係が参考になる。写本と版本との両者は、よくよく見ないと判別しにくい面がある。なかには枠（匡郭と言う）や罫線のないものがあり、毛筆の筆記文字と見間違えるほど巧みに彫版し、印刷したものもある。

なお、版本の場合における印刷の方法は、一枚の版木の版画のように裏返して彫刻する「整版本」と一文字ずつ文字を組み合わせて原版を作る「古活字本」に分けられる。古活字本とは銅・木の活字によるものをいう。この変遷の歴史は、まず整版本から古活字本へ、古活字本からまた、どう言う訳か整版本に逆戻りしている。この戻った理由は、「仏教の布教を目的に始まった出版が、17世紀前半から営利を目的とした商業出版に変貌したことによる」という説が今のところ有力だ。

(3) 本の体裁（装訂）とその成り立ち

日本の古典籍は実に1300年の長い歴史があり、バリエーション豊かな形態は世界でも類を見ない。現在でも電車の中などで読む文庫本や週刊誌の装訂は、ハードカバーではなくソフトカバーで、持ち運びに便利な形になっている。一口に本の形と言っても、

その種類はさまざまである。和古書の装訂を見るときの切り口は、糸を使ったものか、糊を使ったものに区別してみると分かり易い。後に述べるが装訂の歴史は、「糊」から「糸」を使ったものへと変遷している。

ア 糊を使った装訂

平安時代の書写本が今日残っていることから日本の古典籍の素材である和紙は世界に類を見ないほど良質であることが分かる。また、古い書写本の殆どが巻き物（卷子装本）の体裁をとる。

・巻物

巻物は卷子本（かんすほん）とか巻本（まきほん）継本（つぎほん）と呼び書物の発生の古い形であると同時に、既に中世からあった便利なルーズリーフとも言える。ルーズリーフとは、中身の用紙を自由に挿入したり取り外したりできるノートのことで、巻物（卷子本）は、もともと最初から長い1枚の帯状の紙ではない。短い紙を糊付けして長くしているのだ。紙を継ぎ足し、継ぎ足し書き続けていくうちに、後で削除したいところや追加したいところが出てくればこの部分でも自由に切り離したり、継ぎ足したりができる。まさに巻物は今でいうルーズリーフと言ったところだ。実に合理的で便利な様式となっているが、ただ、巻物は繙読には不便で本文の最後の方を見ようとしたら、時間をかけてくると巻き開いていかねばならない。

そこで、巻物はさらに工夫を凝らし読み易いかたちに変化を遂げて行く。

・折本（おりほん）

このような巻物の欠点を改装して折り畳んだ「折本（折帖）」が登場することになる。勿論、巻物の軸は取り外すことになり、「折本」には表紙がつく。一定の幅で折り畳んで、最初と最後にそれぞれ表紙をつけた本で、帖装本（じょうそうほん）とも呼ばれている。ただ、折り目が破損し途中で脱落し易いなどの欠点がある。

・旋風葉（せんふうよう）

折れ本の弱さを改良した形態。今度は、折帖の背に糊づけしてバラバラにならないようにしたものもあるのが旋風葉である。聞き慣れない呼び名だ。本を開くと糊付けしていないところから空気が入り各葉がひらひら胡蝶のように翻るので旋風葉とか胡蝶装と呼ばれている。次に、この旋風葉を工夫した粘葉装（でっちょうそう）が生まれる。

・粘葉装（でっちょうそう）

巻物、折本、旋風葉は、どれもみな短い紙を帯状に長く継いでいく面倒さがある。そこを改善したのが粘葉装である。帯状の継ぎ紙方式を取り止め短い紙をそのまま使った。つまり旋風葉の折り目の部分を切って裏表が見える様になった。これで、紙の儉約を兼ね、紙の両面が使い便利になる。但し、紙は薄くても丈夫な上質の紙が使われることになる。古書写本の殆どがこの装訂である。

このように、工夫を重ねて巻物→折本→旋風葉→粘葉装と変化していく。しかし、形態が簡便に発達した後も大切なものや正式なものは巻物として仕立てられた。これまでは、すべて糊付けした本の装訂の紹介である。

イ 糸を使った製本

次は糸を使った装訂の代表的なものを2つ紹介しよう。

・綴葉装（てつちょうそう）

粘葉装と同じノートブック形式であるが、糊を使わず糸を使ったのが綴葉装で、列帖装（れつじょうそう）とも呼ばれている。わが国独自で工夫された装訂方法であるという。紙（料紙という）を数枚から10枚ほど重ねてから2つ折りした一括りを数括り重ねて糸で綴じ表紙をつけた本である。平安時代以降、粘葉装と共に物語や和歌集などの古写本によく用いられた。

・袋綴（ふくろとじ）

和書の代表的な装訂。2つ折りした料紙を重ね、折り目の反対側を綴じた本で、両面書写に向かない薄い紙の写本や古活字版・整版の多くに使われていた。

以上、工夫を続けられた装訂とその成り立ちを簡単に紹介したが、関心のある方は、国文研のホームページ上で、より詳しく見ることができる。また、図書では山本信吉『古典籍が語る』（八木書店、2004）、川瀬一馬『書誌学入門』（雄松堂出版、2001）などに詳しい。

4 古典籍の特徴について

(1) 代表的な3つの特徴

多種多様なかたちで人々に読み継がれ大切に保存されてきた古典籍の特徴は、著作成立後、転写による異本が多く、今日の新刊書と違って1点1点異なる

顔をもつ。さらに、その1点1点ごとに書物に秘められた「歴史」固有の来歴がある。筆で写し取った写本は勿論のこと、書物は、①書かれた内容、②本という形態、③受容の歴史、の3つの要素で成り立っている。

古写本では、奥書、筆跡・書風や料紙の装訂などから年代を推測する。又、和古書の目録を作成するには、主に次の変化を考慮する。

ア 消耗する版木・料紙などの変化

同一の版木による印刷であっても、印刷の都度埋木等の修訂がおこなわれたり、書名が変更したり料紙が異なるなどその状態が変化する。

イ 原装か修繕したものか（保存状態の変化）

長く伝来する間にその装訂の特徴から、さまざまな形態的な改変が行われる可能性がある。

ウ 所蔵者の変遷とその書入れ

伝来する間に所蔵者によって書き加えられた書入れや蔵書印が付加されることがある。しかし、稀に蔵書印は所蔵者以外が捺す場合もあり、年代判定の決め手にならないこともある。

このような古典資料を整理する場合、書誌記述を共有する現代の同版の資料と異なり、以上の固有の来歴となる特徴は資料の判断に重要であり、特に、書誌記述にあたっては、何を採録するのかを適切・適切・誤解なく表現しなくてはならない。むろん、1点ごとに顔が違うので別々の書誌を作成することとなる。

(2) 書名についての特徴

ア 同内容で複数の書名をもつ

同じ内容であっても異なった多様な書名をもったり、一つの本の中にいくつもの異なった書名が存在する。この理由は、①著作成立後、多くの写本が作成されている、②版本については、内容が同じでも版が重ねられる度に多様な書名をつけている。

イ 書名が同じで内容が別ものもある

同名異書も多い。今昔物語集の別書名「宇治大納言物語」はよく知られているが、世継物語の別書名として「宇治大納言物語」が同じ書名である。また、「宇治拾遺物語」の諸本の外題にも同じ「宇治大納言物語」がある。

(3) 著者についての特徴

ア 一人で複数の名称をもつ

著作ジャンル・執筆時期により使い分けを行って

いるものがある。例えば、江戸っ子の戯作者・山東京伝の絵師として名称は、北尾政演である。また、滝沢馬琴は、著作堂、玄同、蓑笠、曲亭の名称を使い分けている。

イ 同名異人

浮世絵師・役者などのように、同一の名称を代々受け継いでいくものがある。

以上のような古典籍には特徴があり、現代の新刊書と違って、特に資料の形態と来歴の正確な記述が必要となる。それにより、書物が各時代の文学・学問にどのような影響を与えたかを知る手がかりを提供し、文学史あるいは学芸史の研究に大きく貢献できる。

5 担当業務と関連して印象に残ったこと

(1) 蔵書印の魅力

蔵書印は誠に読みにくい特殊な文字で、判読するのに泣かされるが、古典を購入する場合にも嘗て誰が所持していた書物かによって価格が左右することがある。蔵書印は貴重な手がかりとなっておりと同時に書物の価値を高めるものもある。

昨年、東京の古書会館で古典籍入札会があり、木村兼葭堂の蔵書印のある巻物を見つけた。どこから見ても確かにあの木村兼葭堂の大ぶりの蔵書印に間違いはない。あらかじめ用意していた蔵書印のコピーを何度も見比べた。が、この蔵書印は木村兼葭堂の蔵書印を真似た手書きの印であった。よく見ると紙の上ののっているだけで凸凹がないようであったものの、よくよくじっくり見ても印と手書きの違いは、甚だ分かり辛いものであった。

有名人・著名人ともなると、贋の手紙をはじめ偽筆、または著名な人士の名を名乗って書く偽書などもあり、いつの世も贋作があるので注意しなければならない。

(2) 中世からあった紙の再利用

紙はとても貴重だったので、用事が済めば不要となる身近なカレンダーや手紙の裏は常に別用に使われていた。人から届いた手元の手紙の裏を使って公文書を書いたり、カレンダーつまり暦の行間にびっしりと日記などを書き込んでいた。

・紙背文書（しはいぶんしょ）

とりわけ、公家の日記には手紙の裏がよく使われ

ていることが多い。この裏の部分を紙背文書という。源頼政の書状のように歴史上の有名人の筆跡は真似されがちで偽作者が多く世に出ているが、紙背文書であれば、思わぬ歴史的大発見があるかも……との小川剛生講師の話を面白く聴かせて頂いた。

本学でも、この平成17年1月に「勸修寺御八講講師請文」の紙背文書を購入したところだ。貴重な平安末期の資料である。紙背文書は、厄介なことにあくまでも紙の裏の文書なので、表の文字を読むようにはいかない。鏡を使ったり、光に透かしてみたりして一苦労する。時として綴じ紐を外してみることも必要となり、これを研究しておられる小川先生は、「紙背文書をバラして綴じ直すことがあれば、ご一報を。全国どこでも飛んでいきます」と言っておられた。モノが紙裏だけに、研究条件の辛さや苦労があるようだ。今後、紙背文書研究者のためにも紙背文書をバラしてたまたま読める環境が整った時に、各館が紙背文書ばらし読み可能期間として登録する制度などがあってもよいのでは、と思った。

(3) 国立国会図書館の古典資料とその電子化

紙面の関係上、印象に残った2点を紹介したい。

ア 電子化で増える原資料の利用

意外なことに、今までは古典籍の利用対象は研究者に限られていたが電子化を進めていくと所謂利用者の民主化が進み一般の利用者が増えた。この結果、利用となると利用者は原資料に戻っていく傾向にある。画面では見難い、わかりづらい、どうしても現物を手元において見たいのが理由のようだ。

イ 虫害の発見方法

虫害の発見方法については、大変参考になることを教えて頂いた。虫害が進行していても一般にはわからないが、卵が孵化し成虫すれば虫は光に集まるので非常口誘導灯の辺りに常に黒い虫がいないかを見ておくと良い。もし、虫が発生しておれば、「虫のふん」のある本を探してみる必要がある。

6 所 感

古典籍の基礎的な知識とその特徴を紹介した。人から人へ失われることなく伝えられてきた文化財としての古典籍。弱々しい紙が日本人の心の支えともなり大切に扱われ、よく残ったものだと感心する一方、今後は、私たちが古典資料を後世に伝達するためにも整理・保存する役割の大切さを再認識した。

今回の研修は3日間ではあるが漢字から仮名が生まれ、あの連綿体の美しい書体を持つ日本独自の文化に触れ、少しでもその世界を理解することができたように思う。今後の業務をすすめる上で貴重な体験となった。古書は、直接手に取れない資料を探す利用者のためにもわかりやすい目録作成と共に書誌学的な重要な拠り所も目録に求められる。例えば、版本や筆写本を見て、いつ誰が何の為に書写または印刷したのか。さらに書写の場合では、底本にどこまで忠実に写しているのか、などを考察するには、専門的な知識の上に数多くの古典籍を見て得た経験が必要となり、一朝一夕に理解を深められそうもない。私にとっては、早急に解決できそうもないこれからの大きな課題である。

もともと関西大学図書館は丹念な目録作成で名が通っていた。この陰には書誌学者としての天野敬太郎氏とその薫陶・教示を受けた先輩たちの努力を見過ごすことはできない。しかし、現在、アウトソーシングにより日常的に目録を取らない職員が増え、今や風前の灯火状態で、先達に申し訳なく、また、心細い限りである。このような中で自らの力量を高めるためには現場での実践を重ねていくことが極めて大切である。しかし、現実には効率を優先すればする程、実践の場が少なくなる傾向にある。どのようにして人材を育成していくのか。その仕組みこそが求められている。人材育成は重要な課題でもある。

いずれにしても、図書館活動の中心となるのは図書館員で人材は宝である。コンピュータはひとつの道具に過ぎず、その道具を使うのは図書館員であり利用者である。「古書の特徴は普遍であるが、これを検索するシステム環境は時代とともに変化する」

と言われた講師の言葉が印象に残っている。コンピュータを駆使する現代は、使い勝手の良い道具・システムが求められ、その道具を上手く活用しているのか、をチェックし評価することが大切である。その評価の結果は、図書館の前進のためには謙虚に受け止めなければならない。図書館の発展も衰退も人次第で決まる。

この研修を基本的な知識の習得だけに終わらせず、実務に活かすことこそが重要であることは言うまでもない。古書に出来るだけ多く接し、古典籍等の原本や古写本が持つ学術的価値を的確に把握していけるように努力していきたい。余談ではあるが、関西大学図書館には日本近代文学の泰斗となる中村幸彦先生の個人文庫（現在未整理）がある。古書を担当していて山東京伝等の黄表紙本の類など調べたいことがあればこの文庫の本にあたり解決できることがある。私はあらためてこの文庫に支えられていることに気が付き、中村先生の偉大さを感じている。

今後は、世界に誇るべき文化遺産の保存と利用という図書館の果たすべき役割を踏まえ、古典籍資料の電子化と共に資料の虫食い、カビ、劣化や損傷の方面の資料保存にも目を向けてさらに研修していきたい。

お世話になった国文研のスタッフ・講師の方々に感謝すると同時に、私はこのような貴重な講習会に幸運にも参加させていただき、又、業務多忙の中、参加する機会を与えてくださった関西大学図書館の皆様へもお礼を申し述べたい。

最後に、私の理解不足や思い違いで誤った記述があればご指摘頂けたら幸いである。

（まつい まゆみ 学術資料課）